

Lorenzのユニット



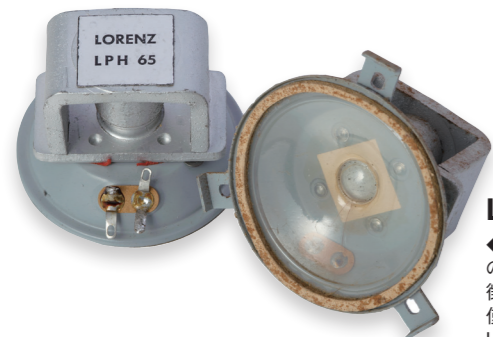
LP-208

←LP215の後継機にあたるユニットで口径が208mmと若干小さくなるが、低域特性を向上させるため、コーン帛が改良され、またフレームもアルミダイキャスト制になり耐力もアップされた。市場価格は12～13万円/ペア



LP-215

↑LPシリーズ最初期のフルレンジユニットで215mm口径となる。薄い鉄製のフレームに反応の速い軽量コーン帛がよくマッチした音場感あふれる音が魅力のユニット。市場価格は13～14万円/ペア



LPH-65

←ポリプロピレン制のような透明な材質の65mm口径のトゥイーターで能率も高く、繊細で滑らかな音質が特徴。初代BBCモニターのスーパートゥイーターとしても使われていた。当時のLorenzのカタログにはLP-312、LP-208、LP-215と組み合わせた2wayシステムで販賣されていたようだ。市場価格は7万円前後/ペア



LP-312

LPシリーズ最大の312mm口径でシングルコーンのフルレンジユニットで、青いハンマートーンの強固なアルミダイキャスト製のフレームが目目を惹く。フィックスエッジのため反応が速く低域特性もスムーズによく伸びるので、小さな箱でもよく鳴ってくれる。また、後期型は深い頂角のコーン紙のセンターに赤いサブコーンが付属され高域特性が向上している。同社の30cm同軸型ユニットのウーファーとしても採用されている。市場価格は17～18万円/ペア

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販賣されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

第7回 ドイツのフルレンジユニット

Lorenz

ロレンツの母体となる会社は1921年にベルリンに設立されドイツでもかなり古くから真空管、スピーカー、アンプなどを生産している。1955年頃に社名がLorenzとなったようだ。50年代になって開発されたLPH-65トゥイーターは特に評価が高く、英国の初代BBCモニタースピーカーであるLS-1(38cm同軸ユニット)のスーパートゥイーターとして採用されていた。

本文/田中伊佐資

キャプション/岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影/彩虹舎



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ドイツのフルレンジユニット

Isophon

1929年にベルリンに設立されたドイツ最大のスピーカーユニット専門メーカーで、戦後は西側に拠点があった。60年代までテレフンケンやシーメンスに数多くのスピーカーユニットを供給していたことは、日本ではあまり知られていないが、有名なシーメンスの25cm同軸ユニット(通称/鉄仮面)のトゥイーターはこのメーカー製となる。



Isophon LA-2106

↑約24cm×17cmの楕円ユニットのセンターにサブコーンを装備した、メカニカル2wayと稱ばれる構造になっているため、より高域特性が豊かになっている。ドイツ製の小口径ユニットはこのメカニカル2wayタイプが多く、サブコーンの材質によっても音質のコントロールが可能で、コンデンサーなども使わずに2wayの形体を取れる利点がある。市場価格は7～8万円/ペア



天板部にあるプレート

VEB ELEKTROAKUSTIK LEIPZIG
KOMBINAT STERN - RADIO BERLIN
Innenraumschallstrahler
12,5 VA
RFT 7857 DDR

RADIO BERLIN

ベルリンのラジオ局からの放音機でL6506ユニットが2台縦に装着されて壁に設置するモニタースピーカーとして使われていたようだ。小振りなエンクロージャーから驚くほど豊かで繊細な臨場感ある再生音で鳴ってくれる。当時の西側諸国が生産していた見た目にもやりすぎと思える構造やデザインのスピーカーとは逆の、最大限に無駄を省いた性能重視を目的に開発された事がよく分かるシステム

RFT

戦前からあった音響機器メーカーであるテレフンケン、シーメンス、ロレンツなどは戦后になって東側にあった会社部分が国営企業としてひとつに統合されRFTとなり、ライプチヒに本拠地が置かれた。スピーカーや真空管をメインに戦后から80年代までそのままTelefunkenなどの生産技術を受け継ぎ、オールドファッションなスタイルで製品を造っていた貴重なメーカーだったが、東ドイツの統合によって残念ながら消滅してしまった。



L6506

↑ドイツのメーカーはさまざまなサイズで数多く楕円形のユニットを生産していた。楕円ユニットの利点としては長方形のスピーカーのバツルに最大面積のユニットを装着できることと、ユニットの上下の長さの差を利用してよりワイドレンジな特性が得られることにある。薄い鉄製のフレームに約25cm×18cmのとても軽くて距りのあるシングルコーンを採用した楕円形のユニットで、劇場などの壁に複数アレー状に埋め込まれたり、小型の放送用スピーカーに装着されて活躍したようだ。とても繊細で反応が速いユニットで、見かけからは信じられない高いパフォーマンスの再生音が魅力のユニット。市場価格は8～9万円/ペア

ある種の王道的ブランド、RCAのアンプが二回ほど続き、なんとなくヴィンテージオーディオを心得た気になっていたのは甘かった。いきなりドイツに飛んだのだ。それもフルレンジユニットである。そこで思い出すのが、去年、小型スピーカー好きのマニア宅に足を運んだときのことだ。当時、完全に未開のイソフォンを聴かせてもらった。さらっと香りを嗅いだ程度だったが、手なすけてそばに置きたい気品があった。価格が意外にも安く、アトリエJe-teeの岡田さんがよく口にする「知られざるヴィンテージこそ穴場にして盲点」という金言を思い出した。

さて、その岡田さんがまず鳴らしたのはロレンツというスピーカーだ。312mmフルレンジ一発に高域をLPH-65トゥイーターで補っている。エンクロージャーは、同店オリジナルの米松製の密閉。最初のサージ・チャロフ「ブルー!サージ」は、バリトン・サククスがちょうどフルレンジの帯域内に収まっていたプリプリと出た。ロレンツはアメリカにも進出したらしく、パンチ力も相当なものだ。また快活で歯切れがよい。ケニー・ドリュエーのコペンハーゲン録音盤がかかって、その繊細な表現からヨーロッパ製を意識させた。

次に岡田さんは「このスピーカーがおそらく一番多く関わったクラシックで

見かけから想像がつかない音に脱帽 このパワーはゴージャスに潜んでるのか?

も」と壮大な交響曲に替えたのだが、これが尋常じゃないほどハマった。部屋の空気を味方につけたようなスケール感や余韻は、クラシック音痴のほくでも脱帽だった。スピーカーに宿っている歴史という伝説のようなものは、隠しようにも隠しきれないものだ。

次に聴くのは、RFTのスピーカーで、楕円フルレンジが片チャンネル2発の通称ラジオ・ベルリン。さつきからロレンツの上にこじんまり載っている。小型の次に大型で盛り上がりつつ終わりたのに、これでは牛フィレ肉ステーキの次に、前菜のマリネを食べる気分である。しかし、音が出たらどっちがメインかとなった。いや、ここはRFTこそメインと断定したい。ヨーヨー・マのチェロはむしろくちや陰影があつて奥深い。思わず立ち上がりつつスピーカーに寄り、しげしげと眺めた。後面開放。厚さ10mm程度のエンクロージャーはパーティクルボードか。壁掛けできるくらい軽量。フロントパツフルは6個のネジで安易に留まっているだけ。ユニットだってそう強力とは思えない。このパワーはいったいどこに潜んでいるのだろう。キング・コールドも伸びやかに気持ちよさそうに歌う。ユニットはほぼ素っ裸。しがらみの無い音がする。しかし上つ面じゃない。ちゃんと骨格がある。いやはや、ちよとしたカルチャーショックで、しばらく立ったままで聴いていました。